

# フリーマガジン Bridge

- 2007年に第1号を発行
- 最新号は2013年12月に発行した第15号
- 発行部数は2,000部
- 配布設置場所は江田島市、呉市、広島市、県外など
- 現在の設置場所は北は北海道から南は九州までの約90ヶ所

ここから島の暮らしが見える。無料で読めるフリーペーパー、ブリッジ。

**Bridge**  
[ブリッジ]

**04**  
2007 SUMMER

Bridge 4号

特集 海へ。



# Bridge 4号



片手を振り上げてダンスする、ハクセンシオマネキ。



## カニが僕らに教えてくれたこと

教えて、館長さん!!

僕らは島に暮らしているけれど、  
いったいどれだけこの島のことを知っているだろうか？  
そう考えたとき、たまたま知った『カニの観察会』。  
カニなんてたいして珍しくもない……、それが意外や意外。  
身近にいるカニたちは、僕らにいろんな事を教えてくれた。



江田島（大柿町）で見ることのできる海辺の生き物がずらり。オールカラー 200 ページの、写真も豊富な海の図鑑、『大柿町の海辺の生き物』。江田島市内に在住の方には 500 円、市外の方は 1000 円で販売中です。購入のお問い合わせは環境館（0823-57-2613）まで。

写真：岡本礼教・岡本容子 取材・文：編集部

### 一冊の本との出会い

ここに一冊の本があります。本のタイトルは『大柿町の海辺の生き物』。大柿町の町制45周年を記念して5年前に作られたこの本は、オールカラー200ページに及ぶ写真も豊富な海の図鑑です。大柿町で見られる海辺の生き物、貝、カニ、エビ、魚、海藻など、とにかくこの辺りで見ることのできる海の生き物が勢揃いしています。

これを作ったのは、そのほとんどが地元ポランティアの人々からなる、大柿町海辺の生き物調査団でした。2年間にわたる調査活動で、さまざまな生き物を観察し、江田島湾のカプトガニ生息の実態や産卵場所の発見など、めざましい成果をあげました。その調査団の活動を一冊に纏めたものが、この本というわけです。

大柿町の江田島市合併を前にして、残念ながらこの調査団も解散。その後を受けて作られたのが、大

柿自然環境体験学習交流館（環境館）です。環境館は平成14年に廃校となった深江小学校の施設を譲り受け、海に特化したさまざまなフィールドワークを企画し、「環境館友の会」の会員たちとともに観察会を開催しています。現在、友の会の会員はジュニア会員、シニア会員を合わせて180名ほど。観察会には江田島市外からの参加者もいるそうです。この観察会に僕らも参加してみました。

### さあ、カニを観察しよう

ここは大柿町深江にある鳥戸川の河口。護岸整備が進む江田島市のなかでも、比較的自然海岸が多く残っているところです。夏の大潮の干潮時、ここには干潟が広がっています。ここにカニがいるんですかね？橋の上から見たら何も見えませんけど……。

「ここからじゃ見えませんよ。干潟に下りてみましょう」と、僕らを先導してくれたのが、環境館の

# Bridge 4号

カプトガニの幼生ついに発見!!  
ちいさな命が教えてくれた  
もう少し僕らにもできるかもしれない  
2、3の事柄

2007年5月1日。江田島湾で潮干狩りをしていた人が偶然見つけた、カプトガニの子ども（幼生）。そのカプトガニの幼生ですが、今は環境館で大事に飼育されています。館長さんをお願いして、水槽から出したその子どもを手のひらに乗せてもらいました。もそもそ、と小さく動きます。この小さなカプトガニが、これから脱皮を繰り返して、全長60センチもある大人になってゆくのです。では、この10センチくらいのおおきさで何歳くらいになるのでしょうか？教えてください。館長さん！



大榎自然環境体験学習交流館（環境館） 江田島市大榎町深江 1073 番地 1  
TEL 0823-57-2613 FAX 0823-40-3100  
URL <http://www.urban.ne.jp/home/fukaesho/kankyokan/>

カニが僕らに教えてくれたこと 8

「この幼生はですね、10回脱皮を繰り返した7年目の幼生です。えーっ、こんなに小さいのにもう7年も生きてるんだ！」

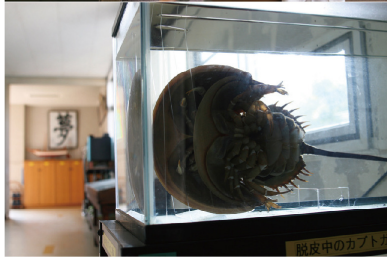
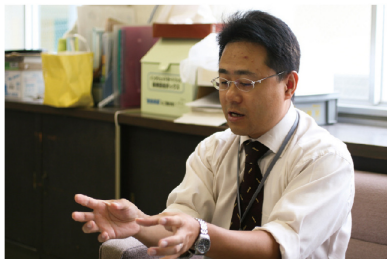
「そう、だからおそろしく今回発見されたのは、7年前に産卵を確認したときの卵からかえった子どもだと思えます。カプトガニの1回の産卵は約千個ほどなのですが、その中で成長して大人になれるのは、1%ほどなんです。だいたい13年くらいかかって大人になり、25年から30年生ぎると言われています。」

カプトガニは砂浜で産卵します。その後、幼生は生まれた砂浜や干潟で成長し、大人になると沖の方へ移動するのです。江田島でも昔はどこにでもいて珍しくもなかったカプトガニも、今では江田島湾のごく限られた地域でしか、その生息が確認できていません。現在、カプトガニは広島県で絶滅危惧1類に指定されています。それだけ目に見えて数が減ってきて

いるということなのです。じゃあ、どうして数が減ってきたのでしょうか？やはり海が汚れてきたからですか？

「水質汚染のことはよく言われているんですけど、実は周りの環境の変

「うん。自然環境を守るとはもちろんだ事ですけど、もっと人間の生活に寄り添いながら、自然とうまくバランスを取って、工夫していくことの方が大事だと思うんです。例えば、科学の持つ力を求



化によるほうが大きいと思うんですよね。実際、水質汚染はかなり改善されてきているんです。じゃあ、僕らはこれから自然環境を守るために何をしたらいいんですか？

ジティブで現実的な方向に向けてゆくこと。これは先程の水質汚染問題の解決が良い例だと思います。自然を活かしながらどう手を加えていけるか、それが人間の知恵です。すよね。」

「多少の環境の変化なら、生物は生き延びようとする力を持っています。じゃあ、どうするのか。例えば、そこに生息している生き物をもっと詳しく調査する。そして、共生するためのより良い方法を考える。この江田島湾も埋め立ての計画が何度も浮上しています。埋め立てはダメだよじゃなくて、そこに生息している生物たちの生活を脅かさないような工夫をすること。画一的な護岸のデザインを見直すとか、方法はいろいろあるはずなんです。ただ今あるものを守るだけじゃなくて、自然とうまくバランスを取ってゆく。そのための人間の知恵なんです、工夫なんですすよね。」

カプトガニが暮らす、この豊かな自然は、これからも受け継いでいきたい。でも、その方法は正しいものがたつたつとつかない、というわけではないのです。小さなカプトガニは、環境館にいます。見に来てね。

9 カニが僕らに教えてくれたこと

ここから島の暮らしが見える。無料で読めるフリーペーパー、ブリッジ。

**Bridge**  
[ブリッジ]

**05**

2007 AUTUMN / WINTER

## Bridge 5号

特集 ブリッジが繋ぐもの

ブリッジが繋ぐもの





# 柿浦小学校六年生がつくったブリッジ

子どもたちと見つけた江田島の町

授業中の黒小先生が手に持っているのは、『柿小版ブリッジ』のプロトタイプ（試作版）。『柿小版ブリッジ』はオールカラー 26Pで100部印刷し、子どもたちの地元、柿浦地区で配布予定。



写真：岡本礼教 取材・文：編集部

一冊の雑誌が人と人を繋ぐきっかけを作り、そこから新しいことが生まれようとしています。人と人、人と地域を繋ぐ架け橋になることを願って作られたブリッジという雑誌は、あるひとりの小学校の先生との出会いをもたらししてくれました。この夏から半年をかけて作られた『柿小版ブリッジ』が、もうすぐ発行されます。

## 始まりは一本の電話から

初夏のある日、一本の電話がかかってきました。電話の主は柿浦小学校の教諭だといいます。地元の小学校の先生が一体僕らに何の用事だろう？「まあ、とにかく会って話をしましょうか。その時には、ここから何か始まるかなんて、僕らは想像すらしていなかったのです。」

その先生の名前は黒小大介さん。江田市能美町で生まれ育ち、広島市内の高校、大学を卒業後、故郷のこの島に戻り、柿浦小学校で教鞭を執っている先生です。先生の担任は六年生。この六年生の道徳の授業で、ゼビブリッジのことを取上げたいというお話でした。

「「きましては、授業に参加していただけますか？」

「えーっ、僕らがですか!?でも、一体何を話せば…」

「ブリッジを作り始めたきっかけとか、取材のこととか、どうやって一冊の雑誌を作っているのか、それを通して子どもたちに、地域

自分たちだけで地元のことを取材して原稿を作って、自分たちの雑誌を作ってもらいたいと思っっているんです。いわば『柿小版ブリッジ』です。それに協力していただ

「私たちがこの島の良さをいろんな人に知ってもらいたいよね」「自分たちの手で江田島のことを調べてみようよ」「じゃあ、学校の隣にある謎の工場。あそことか取材に行ってみようか」「裏の通りの駄菓子屋さんとか」「醤油屋さんも！」



に関わることや、自分たちで何かを作ることに面白さを知ってもらいたいんです」

「もうひとつ考えていることがあります。六年生の子どもたちに、

「それは面白そうですね！それから僕も読んでみたいな。わかりました。やりましょう」

「そうして『柿小版ブリッジ』は、ゆっくりと動き始めました。でも、

「私たちは雑誌の編集作業に取り組んでいきます。」

ここから島の暮らしが見える。無料で読めるフリーペーパー、ブリッジ。

# Bridge [ブリッジ] 06

2008 SPRING



ここから島の暮らしが見える。無料で読めるフリーペーパー、ブリッジ。

# Bridge [ブリッジ] 07

2008 SUMMER



ここから島の暮らしが見える。無料で読めるフリーペーパー、ブリッジ。

# Bridge [ブリッジ] 08

2008 AUTUMN



この場所から始めよう

ここから島の暮らしが見える。無料で読めるフリーペーパー、ブリッジ。

# Bridge [ブリッジ] 09

2008 WINTER



そうだ、牡蠣食べよう。



ここから島の暮らしが見える。無料で読めるフリーペーパー、ブリッジ。

# Bridge

[ブリッジ]

# 10

2009 SPRING

醤油のある暮らし



# Bridge

[ブリッジ]

やあ、いい眺めだなあ。  
**2009 11**  
AUTUMN

vol.11 2009年11月7日発行  
ACT LOCAL, THINK POSITIVE.

家族の風景



take free, and share the spirit

# Bridge 12号

特集 ランドスケープ



# Bridge 12号

倉橋島の最高峰、火山（ひやま）からの眺め。瀬戸内海の島々が一望できる場所。まさに、多島美。《呉市倉橋町》

## ランドスケープ 風景

いつもの見慣れた風景だけど、なんだかとても美しい。



◎ランドスケープ  
（一）望のもとに展開した「風景」景色「眺望」眺め、  
建築及びデザインの分野では、都市における広場や公園などの、  
公共空間のデザインを指す。「ランドスケープ・デザイン」  
庭園などの設計・計画をする庭園の、より大きな空間を扱う概念を  
示す言葉としても使われる。「ランドスケープ・アーキテクト」

# Bridge 13号

特集 気持ちのいい場所。



# Bridge 13号



## 18 田尾 真三子

図書館で働き始めて4年目になる。たまたまあった図書館職員の募集にすんなり受かり、働き始めたら図書館の仕事がすごく面白くてやめられなくなってしまった。生活と本はつながっていると思う。実家は祖父の代から続く製麺所。何らかの形で、自分も家族の仕事に関わりたいなと思っている。港から家へと続く、用水路沿いの細い道は金木犀の香り。今日も窓から見える夕焼けが美しい。

ミナベルホネンの服が好きというよりも、その服が作られていく過程が好きです。テキスタイルの名前も素敵。

『峯川明の旅のかけら』 峯川明 文化出版局




## 17 西 敦子

結婚して島へ越してきて、もう一年と半年。図書館職員の仕事にも少しずつ慣れてきた。もともと賑やかなところが苦手なので、島のんびりとした雰囲気は気に入っている。どこへ行っても、せせこましい感じが無いのはいいな。夕暮れ時の海岸線を眺めるのも好きだ。天気の良い晴れた日の朝、ペランダに干した洗濯物がそよ風に揺れている。そんな心地よい風を、いつも感じている。

『朝のリレー』という詩が好き。詩を読んで想像すると、いろんな場所にいるような気分になります。

『あさ／朝』 谷川俊太郎／吉村和歌 アリス館

by the sea,  
by the people. 

# Bridge 14号

特集 歩く。



## Bridge 14号



建築好きの南川さんに  
案内してもらったのは  
不思議な建物の残る場所  
少し懐かしい気持ちになる風景



特集『散歩日和』  
島を歩き、島を撮る。

ここに暮らしていても  
まだまだ知らない場所がある。  
いつもと違う道を歩くと、違う景色が見える。  
泊野さんと歩いた、沖美の町。



京都から来てくれた  
原田夫妻に見せたかったのは  
僕らの知っている、島の普通の風景。  
いつもと変わらない、いつもの夕暮れ。



「私にとっては、いつもの散歩道。  
だけど、とても素敵な景色が見えるの」  
海谷さんに教えてもらった  
高田のどつておきの場所。

# Bridge 15号

特集 動き始める。





# Bridge 15号

海友舎が再生に向かうまで  
そして、みんなが集まる場所になる。

江田島で築白屋の跡を刻む洋館 海友舎。  
明治後期に下士官集会所として建てられ、  
さまざまな時代を経た。  
さまざまな人を受け入れてきた建物。  
海友舎が再生に向かうまでのストーリー。



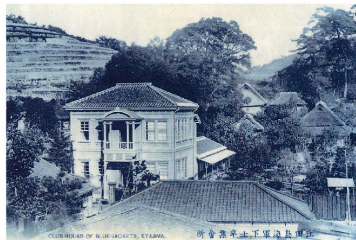
広島県江田島市江田島町、海上自衛隊第一術科学校から教法寺へ向かって少し坂上がったと右手に白い木造の洋館が見えてくる。周りはごく普通の民家ばかりなので、誰もがこは一体何だろうと思うに違いない。初めて前を通りかかると人は少し足を止め、しばらく珍しそうに建物を眺めた後、また立ち去っていく。観光パンフレットにも、この建物は載っていない。地元の人だけが、その存在を知っているような、ひっそりとした建物だった。

その建物は、例えば建築好きや歴史好きの人なら知っていたかもしれない。江田島町の文化財を集めた『江田島遺産』という冊子には、明治後期の貴重な木造建築「旧海軍兵学校下士官集会所」として、この洋館が紹介されている。明治中期、海軍兵学校が築地から江田島へ移転してきた。それに伴い明治後期になって建てられたのが、この旧海軍兵学校下士官集会所だった。下士官とは下士官及び兵士のこと。当時は彼らの宿泊所として、また娯楽兼福利施設として使用されてきた。

終戦後、この建物は民間に払い下げられることとなる。終戦直後には、地域住民への職業普及事業の一環として、洋裁学校と

しても一部が使用されたという。建物を購入した健康器具販売の会社も、戦後の戦争未亡人を支え、地域の復興に貢献してきた。以来、民間の会社事務所兼倉庫として、この洋館は使用され続けてきた。会社事務所なので、当然一般の人は出入りすることはできなかった。この洋館は、こうして百年の間、移り変わる島の風景を静かに見つめてきたのだった。

2012年の春、この洋館をじっと見つめる女性の姿があった。彼女の名前は、南川智子。江田島出身の父のもと、広島市内で生まれ育った彼女は、神戸芸術工科大学を卒業後、家族で江田島に移住してきた。彼女の祖母は江田島に暮らし、宮ノ原にみかん山を持っていた。幼い頃は、家族で週末毎に島に来ては海や山で遊んでいたという。その頃の江田島の印象は、みかん畑と海、魚釣り、海水浴に潮干狩り。つまり、それが彼女にとっての江田島だった。こうして江田島で暮らすようになった彼女は、もってこの島のことを知りたいと思っていた。仕事が休みの日には、地図と資料を片手にいろいろな場所を見て歩いた。そして彼女は、この洋館に辿り着く。



大正頃の旧海軍兵学校下士官集会所

◎海軍兵学校の移転と江田島  
かつての江田島は農村だった。1888年、自然豊かな環境が教育に適しているという理由で、築地から江田島へ日本帝國海軍の海軍兵学校が移転。第一次世界大戦前、江田島はアメリカ海軍のアナポリスやイギリス海軍のダートマスと並び称され、世界に名を馳せていた。戦後、進駐軍がその土地を接収し、現在は海上自衛隊第一術科学校となっている。ここには今も赤レンガの校舎が残る。当時の面影を伝えている。旧海軍兵学校周辺の町にも、日本帝國海軍と深くつながった特有の建物（かつての生徒倶楽部や官舎など）や風景が今も残る。

# 海と風 1号

特集 はじめての江田島へ。



江田島市を楽しむフリーマガジン

Bridge

2011 | WINTER

vol.01 2011年2月28日発行

海と風  
うみとかぜ  
江田島市

はじめての江田島へ。

take free, and share the spirit

# 海と風 1号



## 海上自衛隊 第1術科学校

明治21年に東京築地から江田島に移転してきた旧海軍兵学校。今は海上自衛隊第1術科学校と幹部候補生学校が所在する、歴史と伝統に育まれた場所です。美しく威厳ある建造物と、隅々まで手入れの行き届いた構内を歩くと、いつの間にか背筋が伸びている感じがつくります。

3

©幹部候補生学校行舎は一般の方は立ち入ることが出来ません。今回は特別に撮影許可をいただきました。



海を渡って  
あの島まで。



はじめての江田島へ。



## 海と風 2号

特集 江田島の休日。



## 海と風 2号



### 天せい

泊野さんの行きつけのお店は、鹿川にある天ぷらの「天せい」。店を切り盛りする坂口依里さんと泊野さんは、とても仲良し。実は子ども同士が同級生なんだそうです。天せいの天ぷらは一品ずつ揚げたが出てきます。だから熱々、さっくさくなのです。

さくさくの  
あつあつ。



泊野さんのおすすめ

天ぷら定食 (竹) 1,000円



### いつもの 島の台所へ。

### 旬彩

ランチにお刺身もちょっと食べたいし、天ぷらや唐揚げもいいな。そんな井上さんの行きつけのお店は、職場近くにある、島の台所「旬彩」です。いろんなものが少しずつ、お刺身は新鮮、天ぷらも唐揚げも熱々。気がつけば、いつもお腹いっぱいなのです。



井上さんのおすすめ

旬彩ランチ 850円

# Bridge

ACT LOCAL, THINK POSITIVE.